ガロ名作劇場42

長井勝一インタビュー

「朗ラカニ歩メ」…ガロ94年3月号より

——「シカゴパレス」が入選した頃のことを教えて下さい。

長井　俺が心臓の病気で半年くらい入院していて、それまで南が原稿を見ていたのを退院して、また俺が見るようになった最初の頃だったと思うんだ。原稿用紙が古かったんだよね。すぐに描いて持ってきたなら、原稿用紙新しいじゃない、それが凄くいじってある原稿用紙だったから、描き直したり何回もしていると思うんだよ。それで気になっていて、載せようか載せまいかずっと悩んでいたんだよ。だから原稿に描いてある日付と掲載月がだいぶ違うんだよね。

それでポスターとかいろいろ描いて映画をよく知っているんだよね。73年ごろは日本の映画館は最高で、全国に7千件あったんだけれど、それ以降はダメになってきた。この作品が描かれたのは81年だから、そういう映画館がバタバタ倒れていった時期でもあるんだよ。

——ガロには2、3回持ってきてその時南さんに見てもらって、もっと細密に描くように言われたそうなんですよ。

長井　やっぱり鈴木翁二のファンなんだと思うんだよ。作風を見ると絵の捕らえ方もそうだし、雰囲気も絵そのものも翁二の世界に入りこんでるんだよね。

——ユズキさん本人も自分では意識してなくても翁二さん的な世界が出てしまったと言われてました。

長井　本当はそういうのを早く卒業して自分の世界を作っていけるようにならなければいけないんだよ。

——そういう意味では2作目の「まゆこ理科室」はユズキさんのタッチが出ている作品と言っていいですね。

長井　そうだね。一年くらいの間が空いているけど、その間絵もどうしていいのかって苦労惨憺していると思うよ。けど俺は「シカゴパレス」の続編がくると思ったんだよ。映画でもなんでもそうでしょ、いいものが出るとつい甘えて見る方は続編をほしがるんだよ。そういうのがどこかにあったね。それを期待していたらこの女の子の話を持ってきたんだよね（笑）。で、この作品の良さは難しいよ、一つの心理劇だからね。だからこういうのを今時の舞台劇でやったら非常に面白いと思うよ。

——そうですね、そういう見方をするとまた面白いですね。

長井　それでこの人の作品の良さというのは本当なんだよね。文学の世界で私小説という世界があるだろ、私小説的な作品をやれる人なんだよね。別に驚天動地がなくてもいいんだよ、日常の生活を普通にずーっと描いていくといい作品が出来るんだよね。味があるんだよな。読んでいて飽きないもん、本当のまんがだと思うよ。映画でいったら小津（安二郎）さんの世界なんだよ、たんたんと写しているだろ、あの人の作品って。

——ユズキさん本人もあまり感情を出さないようなもの、ストーリーの単純なものを描きたかったと言われてましたからね。

長井　それで「朗ラカニ歩メ」、これは傑作だと思ったよ。犬はいつでもいるんだけど、人間はたまにしか犬のことを見ないだろ。ところが逆に犬が主であって、たまに人間を見ていたら、こんな世界になるんじゃないかと思うよ。犬から見た人間ってなんだろう、というのとは別に人間の話も作ってあるわけだよ。それで実に犬そのものなんだよ、よく見ているよね。どんな漫画見たってこんなベローンて舌出してる犬、普通描かないよ。本来犬なんていつだって舌出してるんだからね。

——この話も単純ですよね、犬が街を歩いて「でっかい金玉」と3回言われるという、それだけですからね。

長井　なにげなく見てみると犬のってでかいんだよな（笑）。今度見てごらん、体の大きさに比べるとでかいんだよ。それが気になったんじゃないか、ユズキさんは。

ただ残念なのは描くのが遅いんだよね。

——ストーリーが単純なだけにセリフをどうしようかとか、かなり悩んでしまうみたいですね。

長井　もっと気楽にやればいいんだよ。いいもの描こうとしなくたって普通に描いたっていいものができるはずなんだから。こういう感性のいい人の作品というのは、ある程度作品を描いて神経が張り詰めているからいいんだよ。たしかに苦しむことは大事だよ、苦しむから才能を維持できるんだけど、苦しんで最後に何もしなければなんにもならないじゃないか。描くために苦しんでるんだもん描かなければダメだよ。だからもったいないよ。気楽に描いてみた作品はどうなのか、評価されてみればいいんだよ、自分の思っているよりはまだまだいいと思うよ。ただ読むのと描くのとは大違いで、大変だと思うよ。仕事にとっかかるまでがきついんだろうね。きついからつい一日、つい一日と延ばしていってしまうんだろうね。なんでもそう、最初好きでも続けてれば嫌になることもあるよ。

◆構成…志村勝紀（ガロ）◆文責…ガロ編集部

ポストモダンエレジー㉑

文化住宅人の快楽

川崎ゆきお

ニコンF2　50ミリF2

オリンパスL－3　35～180ミリ

文化とは何だろう。と疑問に思いながらも、それほど追求する気はない。何となく「何だろう」と思うだけである。

文化と言えば、文化住宅を連想する。それは僕が文化住宅（長屋風共同住宅）を仕事場にしている関係で、馴染んでいるためである。関西で「文化」と言えば、文化住宅を指す。難しい方の文化は日常的にはほとんど使うことはない。たまに「文化的な暮らし」とか「文化製品」や「文化教室」程度の使われ方をする。「文化遺産を守ろう」などと発言する人は僕の周囲にはいない。

また関西では「文化人」と呼ばれることは、お公家さんと同じで、飾り物的な存在として受け止められやすい。酒宴の席で「よう文化人」と声をかけられた場合、侮辱表現に近くなる。それは意見を述べてくれる人よりも、何かを具体的にやってくれる人の方が普通の人は有り難いからである。文化はやはり具体的な形で機能しないと「文化的」で終わってしまう。

「隣の文化の子が遊びに来る」と言えば奇異に聞こえるが、隣の文化住宅の子供が、僕の仕事場の文化住宅へ遊びに来るのだ。隣の文化の子は、異文化である僕の文化住宅へ平気で乗り込んでくる。文化を越えてやってくるのだ。家主は違うし、建物の形も違うのだが、向かい合って建っているので、同じ文化だと思っているようだ。その少年は知らないで文化間の交流をしているのである。隣の文化には風呂がある。僕の文化よりも、文化程度は高い。だが、風呂屋という文化ゾーンに接する機会があるのだから、それなりに豊かな文化生活をしていることになる。

マンションの子供は僕の文化には遊びに来ない。マンションは文化住宅ではないので、文化の交流ができないのだ。そのてん文化どうしは交流できる。これは文化どうしはアジの開きのように、玄関どうしが向かい合っているため、いつのまにか干渉しあう仲になるためだろうか。

文化住宅には庭がある。家主は庭だと認めていないかもしれないが、そこにネギやニラやサボテンが植えられている。また、進学祝いで植えた椎の樹が兄弟分植わっている。その兄弟の一家はすでに文化から出ていったが、樹だけが残っている。植えた者勝ち置いた者勝ちの世界で、自分の玄関の前だからといって、庭を主張する権利はない。また、権利があるのかないのかの条文もない。文句さえ

ミノルタα7000　35～70ミリ

でなければ、自分の庭を好きなところで造ってもかまわない。

僕の部屋は二階にある。玄関前は僕の領域なのだが、隣のおばさんの鉢植えが侵入してきているし、鉄柵には隣の文化のおばさんが布団を干しに来る。同一文化内では不思議ではないが、異文化のおばさんが干し場を求めてやってくるというのは、文化どうしの文化的なつき合いだろうか。このおばさんは情報収集癖があるいわゆるカシマ婆で、敵に回すとうるさい存在である。だが、このおばさんはパートでガソリンスタンドに勤めており、僕はそのスタンドを利用している。知った人がいる店の方が、給油もスムーズなのだ。

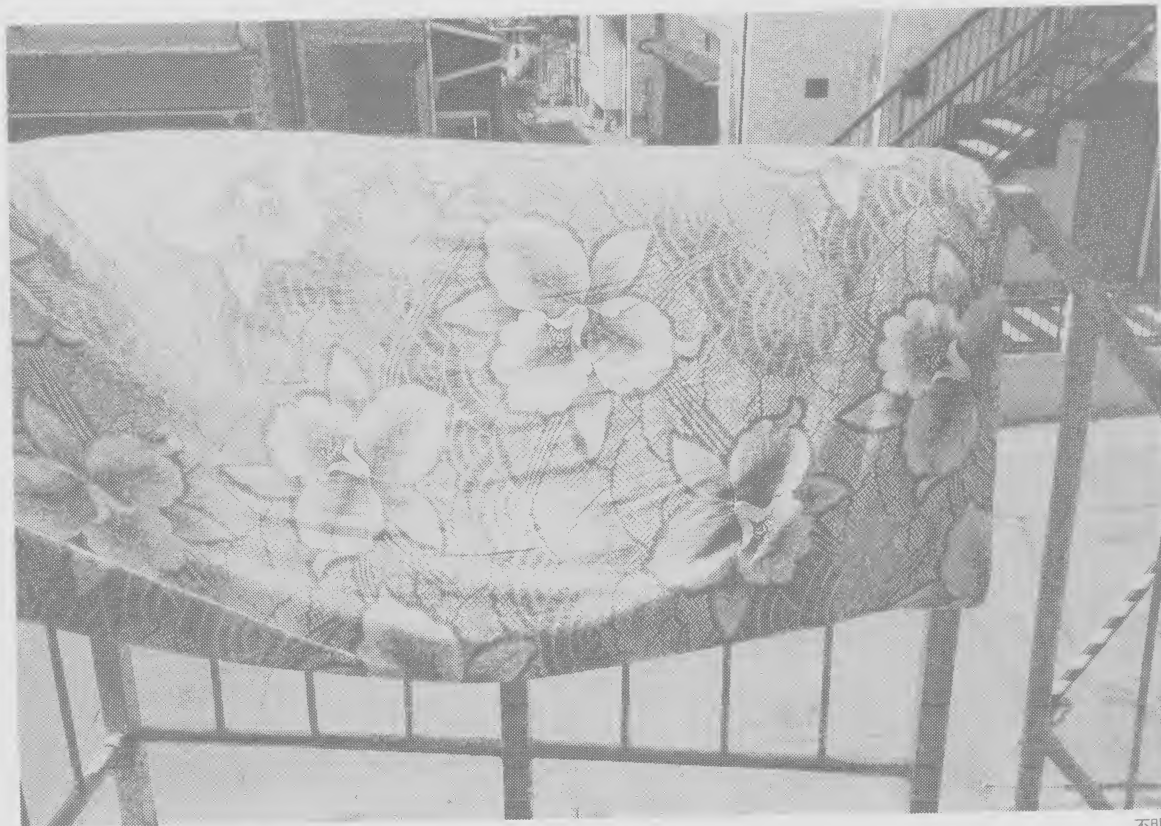
隣の文化の猫の親子が、僕が住む文化へ平気で渡ってきて子猫に乳を飲ませている。夜中など踏んでしまいそうである。その子猫が大きくなって、僕らの文化に居ついてしまう。コンビニで買った弁当の残りをやっているうちに、いつのまにか催促に回るようになってしまった。これはこの子猫の営業努力で、しっかりテリトリーを守っている。文化で育った猫は、文化の性質をよく飲み込んでいて、文化構造の隙を利用して、上手く立ち回っている。

文化で育った犬は、その文化の住民すべてに愛想がいい。文化を一軒の家だと思っているのか、文化人（文化住宅に住む人々）にたいして吠えたりしない。身内だと思っているのだ。別にエサをやらなくても、犬は懐いてくれる。

それですっかり僕は文化住宅人になってしまった。文化を語るとき、文化住宅を抜きにしては語れなくなってしまった。下世話な話になったが、文化はやはり下世話な次元で形になって機能しないと、文化ではないような気がする。それは文化とは快適な文明を維持するための約束事のようなものなので、日常生活の中に入り込まないと、文化ではないと言うことである。文化的ではやはり駄目なのである。

文化包丁や文化鋏はあまり切れるような印象がない。野性的な凄さをやわらげるのが文化かもしれない。

僕の好きな文化住宅も、今後新たに建つことはないと思う。家主にとっては安く建てられるが、ワンルームマンションを建てた方が効率がいい。だから新築の文化住宅など見かけなくなった。近所に建つのはすべてマンションである。まさに文化の危機である。

オリンパスＯＭ－１　200ミリＦ4

不明

オリンパスOM－4Ti　28ミリF2

キヤノンオートボーイD5　32ミリF3.5

「ディランがロック」

みうらじゅん

第13回

TEXT & ILLUSTRATION BY JUN MIURA

"ブートレック"という言葉は知らなかった。いわゆる"海賊盤"というものがこの世に存在する事を知ったのは高校時代、輸入盤屋の片隅で見つけた「HELP BOBDYLAN」と書かれたチープなレコードだった。

ボクはその頃ドップリ、ディランにはまっていたし、ディランと名の付くものは何でも買わなきゃいけない宿命を背負っている（と勝手に決めていた）。

曲目の表示も、ディラン以外のアーチストのクレジットも、もちろん歌詞カードも入っていない単なる盤。針を降ろしたとたん"しまった！"と思った。録音状態もひどく、曲によっては途中で中断されているものなどあって、「HELP！」と言いたいのは、こっちだと思った。それでも月に三千円の小使い人生、仕方なく元を取るべく何度も聴いた。内容は60年代後半、フォーク・ロック期にスタジオでセッション風に行われたもの。これらの何曲かは後に正規のアルバムとして発表された「ブートレック・シリーズ」に信じられないクリアーな音源で発表された。そして何度目かのチャレンジ、ボクは初めてそのアルバムのタイトルの意味が分かった。「HELP！」とはあのビートルズの曲であり、ちっとも原曲に近くないメロディでディランが歌っていたのだ。

「ヘルプ　ミィ〜　ヘルプ　ミィ〜♪」

ディランはかつての自分の曲ですら、全く違ったまるで新曲であるかのように歌う事が多々ある。"過去の自分に影響されたくないのさ"と、あるインタビューで自分のアルバムは聴かないと言っていた事がある。この人は前進あるのみ、ビデオのタイトルのようにいつだって"DON,T LOOK BACK"なのだ。「ボブ・ディラン　グレイテスト・ヒット第　集」という二枚組のアルバムが発表された。ジャケ写はバングラデシュのコンサートの時のものだ。まるで後光が差した仏像のようにディランはいた。このアルバムは単なるかつてのベスト盤ではない。今まで音の悪い海賊盤でしか聴く事が出来なかった曲やシングルだけで発表された曲など、貴重な6曲が含まれていた。グレイテスト・ヒットと言いながら、こんな事が平気で出来る人はディランだけだ。ボクは先ず噂にだけは聞いていた"明日は遠く"という曲に針を降ろした。

"もし今日が果てしないハイウェイでなく
もし今夜がまがりくねった山道でなく
もし明日がそのように遠くでなかったら
淋しいということは何の意味もないだろう
そう、私の恋人が待っていてくれさえしたら
そう、彼女の心臓がやさしく打つ音が聞こえさえしたなら
もし彼女がそばに寝ていてくれたなら
私はもう一度ベッドで寝よう♪"

ディランは絶えず歌詞の中で、答えは女にあると言う。"もしこの世に神がいたなら、それは女だ"と言う。

ボクはその曲を初めて聴いた時から、随

13枚目

グレイテストヒット２

写真提供:ソニーレコード<48DP 1031-2>

分大人になってしまった。望むと望まないに拘わらず歳をとってしまった。一人で生きていけると思ってた昔、そしてそうあるために嘘もいっぱいついてきた。しかし、今ディランが歌う意味が少しづつ分かってきた。そうだ！　男は女、女は男と係わり合う事で修行を続けているのだ。安らぎだけを求めて、うまくやっていくのは誰だって出来る。落ち込み傷付き、気付かず捨ててしまった大切なものを悲しむ時、歌なり作品が生まれるんだ。ボクはたぶんある日、そっちの道を選択してしまったのだ。

　ディランは〝マスターピース〟という曲でこうも歌う。

〝いつか　すべてはラプソディのようにスムーズになるだろう　私が傑作をえがいた時には♪〟と。

さん

トロッコと懐しい人々

文●木邑直子
画●久住昌之

メメさんが乗り込むと、トロッコは「任せとけ」とばかりに走りだしました。

ロッキー山脈の麓はすっかり春の気配でした。雪がだんだんまだらになって、若い木々が芽吹いています。

風は冷たいけれど、空が高くて良い気持ち。

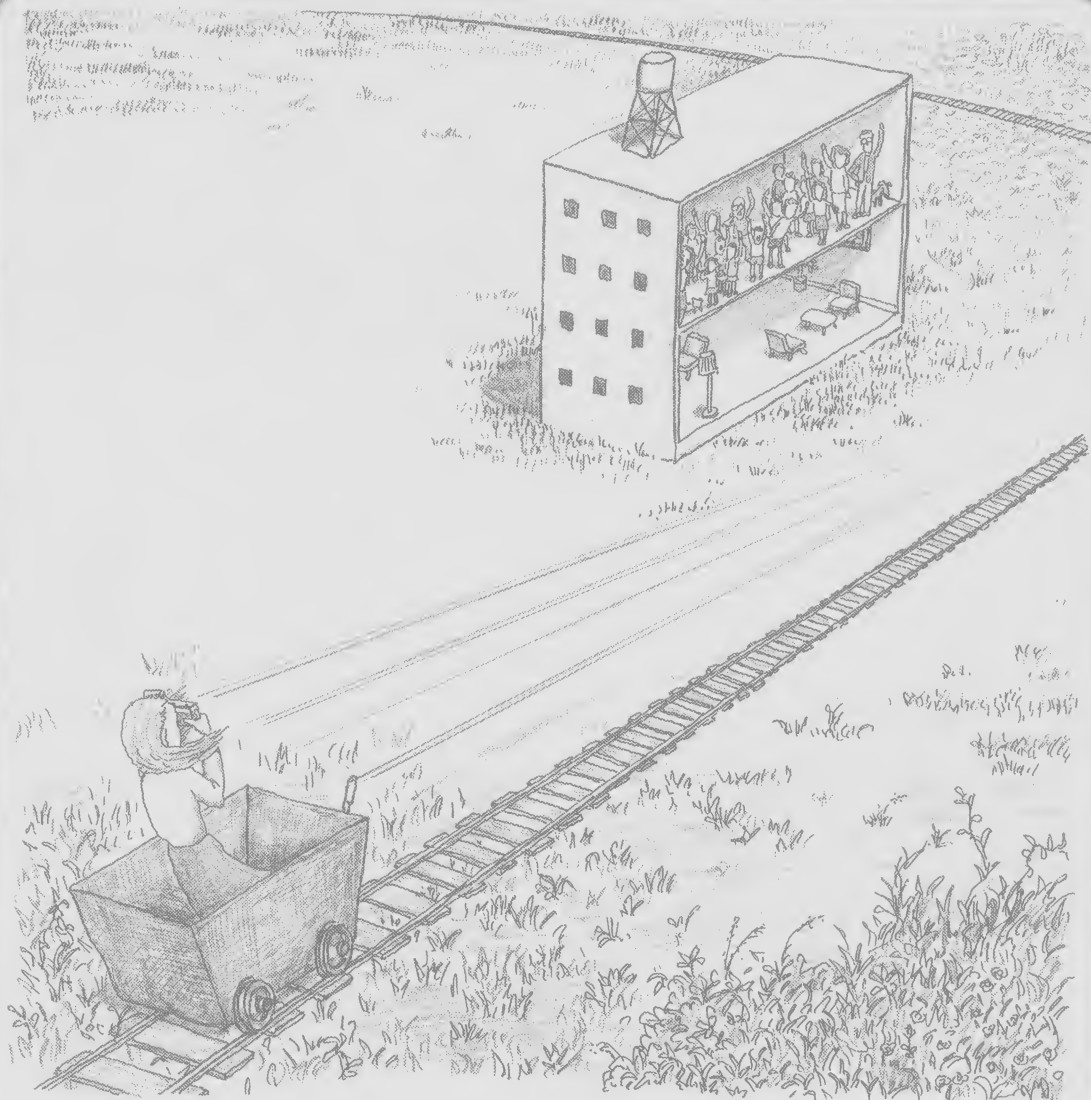
そうするうちに何となく気がついたことですが、ゆっくりと過ぎていく木々の蔭から、誰かが覗いているようなのです。

最初のうちは分かりませんでしたが、近所のスーパーの人とか、いつも通勤電車で一緒になる人とか、どうでもいいような、けれども見覚えのあるような人の顔が木々の蔭から現われ始めました。

それが誰なのか、見ようと目をこらすと、もう次の瞬間には通り過ぎてしまう。じれったく、

「誰だっけ、今の誰だっけ」

と、思い出したとたんに、またどこかで見たような顔が覗いているのです。

どの顔も、こちらを見ていながら、ぼんやり別のことを考えているようです。何か熱心にそれぞれのことをやっていて、ふいに顔をあげたような空っぽの表情……。

坂道に出たら、親しい人の数が多くなってきたようです。親友のエミちゃんの次に、仲良しのお祖父ちゃんの姿を見つけたとき、メメさんは思わずトロッコを止めようとしましたが、スピードが上がっているので無理でした。

「そうだ」

メメさんは、写真を撮っておこうと、ベビーカメラを取りだしました。変な形のカメラですが、のぞくところが極端に下の方にある以外は、まあ普通に使えそうです。

桜草の咲いた小道を曲がると、やがて前方に不思議な建物が見えてきました。正面の壁が無いミニチュアビルで大勢の人が手を振っています。

小さくてよく見えませんが、家族や親戚、クラスメイト、会社、近所の人達みんなが集まっているようでした。

「メメさーん」

「メメさーん」

みんなが呼んでいます。犬のプチが吠えているのも聞こえます。メメさんは涙がこぼれてきました。そしてカメラを向けましたが、シャッターがおりません。あせればあせるほど、手が滑って、どうしても上手くいかないのです。

トロッコはメメさんを乗せたまま、とうとう行き過ぎてしまいました。そして、猛スピードで原っぱを抜けていき、突然止まってしまいました。

着いたのは海でした。

見たこともないほど、暗い、暗い海でした。

蜂巣敦 ATSUSHI HACHISU
日本の殺人者 MURDERS OF JAPAN

さて、今回から新シリーズです。まず、ちょっと波長を合わせてみよう。

ワンツー・ワンツー

大きく息を吸ってはいて、吸ってはいてみて。

ワンツー・ワンツー

スーハー・スーハー

もし、ここがメッカであるならば、貴方は敬虔でなければならない。姦淫してはならない。殺害してはならない。弱者のふりをした偽善者であってはならない。VXや青酸ガスをばらまいてはならない。ポワされてはならない。もう、コンピューターを使って、そんなことをするのはやめろ。ここがメッカであるならば。

絵と文学とお金

第四回

メッカ殺人事件

だが、ここでいうメッカとは、新橋のバー「メッカ」のことであり、そこで起こったことは、相も変わらず血がダラダラと流れるようなことなのだ。「メッカ」の二階ホールには、六組のテーブルと六人が座れるカウンターがあり、ホール中央には踊り場が設けられ、カウンターの上約二メートル半の高さには扇型をした一坪ほどのバンド席がつけられていた。そして事実、カウンターには血が天井からボタボタと落ちてきて、客と女給たちはビックリしたのだ。そりゃ、ビックリもするだろう。メッカでは、小意気な踊りが、しびれる音楽が、カウンターには酒が、天井から血が。

殺害犯人の名前は、正田昭。正確にはグループの犯行で、正田は主犯である。当時二十四才で、慶応大学経済学部を卒業していた。なかなかの美男子だったこともあり、事件後、手配された彼はちょっとしたスターのようだった。刑事が、水商売関係の女たちを中心に手配写真をくばって聞き込みに歩いたが、女たちは口々に正田の容貌をほめそやし、逆に手配写真をねだる有り様だった。そして、その多くはあたかも恋人の写真のようにしまいこまれたという。

「あたい、こんなオトコがいたら、それこそ血途をあげっちまうな。コロシなんか、なによ。あたい、かくまってやるわ」

ハハハ、事件の周辺なんて、いつの時代でもこんなものだろう。苦渋を味わうのは、被害者のごく限られた周辺である。あと、あえてつけ加えるなら、加害者の、か。

事件の概要について、もう少し詳しく述べよう。

昭和二十八年七月二十七日の夜、まもなく九時になろうというときである。「メッカ」二階のカウンターで飲んでいた白いワイシャツの男の肩口に、ボタボタと天井から滴が垂れてきた。気づいた女給が佗びながら布で客の肩口を拭くと、その布は赤色に染まった。驚いて天井を見ると、白い漆喰天井の一部に赤というよりはどす黒い染みができており、そこから次々と滴が落下してきているのである。

「メッカ」の裏に住んでいた仕事師に頼み、天井裏に梯子をかけて登ってもらう。そこで血まみれの中年男の死体が発見され、警察に届けられたのである。被害者は両足を電気コードで縛られ、全身三十ヶ所を鈍器でめった打ちにされていた。首にもはっきりと、紐状の物（電気コード）で絞められた跡が残っていた。他に、刃物による刺し傷が数ヶ所あった。被害者の身元は、事件の報道を見た会社同僚の届によって、まもなく判明する。証券会社のブローカーで、当時三十九才だった。殺された当日、証券を担保に銀行から四十万円を引き出している。当時、捜査にあたった中堅刑事の給料が二万円だったというから、かなりの額だ。

死体が発覚してから、「メッカ」に住み込みで働いているボーイが一人、行方をくらました。名を、近藤という。聞き込みの結果、近藤は事件の前日、若い二人の男と、「メッカ」の隣にある喫茶店で会合していたことが明らかになる。男のうちの一人が、「ショウダ」と呼ばれていたこともわかった。被害者の勤め先を調べると、見習いで働いている男が欠勤していた。この男が正田昭であり、「メッカ」の常連客でもあった。

犯人・正田 昭

事件の日、バーテンのMも体調不良を訴えて早引けしていた。有力容疑者の一人として手配されるが、まもなく捜査の線から外されている。読売新聞社会部の記者が、Mの所在をつきとめ、談話を取った。そして、洲崎に正田が行きつけの特飲店があるという情報を得、車を走らせる。そこに、A子という正田のなじみである二十五才の女性がいた。

A子は、大きな目と胸を持っていた。厚い唇は、水商売の女らしく真っ赤に塗られていた。A子は正田の印象を、胸を患っていたらしく陰気な感じがし、絵が好きで店に来ても絵ばかり描いていたと語っている。A子は自分をモデルにしたという正田が描いた似顔絵を見せ、記者は謝礼を払って、その絵を譲り受けた。

のちに、正田が逮捕されたとき、藤沢にあるアパートの部屋の壁には、正田の描いたルンバを踊る女の絵が貼られていた。この絵の女は、記者が手にいれたA子の似顔絵とそっくりだったという。

捜査陣は、慶応大学時代の正田の学友に聞き込みをはじめた。そして、彼が学生時代からよく出入りしていたという三田の、ある雀荘を訪れた。しかし、店は閉まっている。碑文谷に住む雀荘の主人に会い、理由を尋ねると、あの店は親戚で二十二才になる相川という男にまかせきりになっているという。喫茶店で会話していた、もう一人の男は、この相川に違いないと捜査陣はあたりをつけた。

相川はまもなく、正田のアパート近くでうろうろしているところを不審尋問され、逮捕されている。しかし、彼は自分は犯行の誘いを受けたが断り、口止め料として二万円もらっただけだと主張した。

事件翌月の三日、近藤が静岡で自首してきた。新聞でみると正田はあんなにたくさんの金を手にいれたのに、自分には三万円しかよこさなかったと近藤は恨みごとを言った。三万円は、つかい果たしていた。近藤によれば、実際に殺害したのは正田だという。

ここで、不可思議な出来事が起こっている。

被害者の四十九日が来ても、正田の行方は知れない。捜査にあたっていた藤巻小太郎という刑事が、被害者の家に焼香に訪れた。遺族には、妻と十二才と八才の二人の子供がおり、子供らは藤巻が刑事だと知ると、正田を捕まえたら殴らせてくれろと泣きながら言った。やるせない気持ちになった藤巻は、未亡人となった夫人に、

「ご主人は、夢枕に立ちませんか?」

という質問をした。その後で、とっさの事とはいえ、なぜそんなことをきいたのかと藤巻は自問したが、解答は出なかった。夫人は「見ていない」と答えた。

その二日後、夫人が捜査本部にタクシーで乗りつけてきた。用件は、被害者の旧宅に住むことになった実兄が、夫の夢を見たというものだ。被害者は、夢の中で、

「正田は、京都にいる」

とたしかに言ったという。

事件から七十八日後、正田は京都に潜伏していたところを逮捕されている。

【つづく】

アパートの壁に貼ってあった犯人正田の絵

遅刻男論争漫遊記

松沢呉一

vol.54

七月一日(土)

夕方、高円寺古書会館に行ったあと、カメラマンの天満君と、『鬼の蝿叩き』の著書近影の撮影場所を探して代々木八幡のヘッドオフィスにロケハン。ヘッドオフィスは天願大介監督でCD－ROMのドラマのシリーズを作っており、出演しないかと誘われる。塚本晋也監督の「東京フィスト」に続く役者仕事。生意気にも台詞のある役をよこせと要求。

夜、ショートカットの桜井君と「魔羅の肖像」にナンシー関謹製の消しゴム版画を押したり、限定番号を入れたり、サインしたり。

七月二日(日)

ショートカット最新号で伊藤タダユキ氏が私に反論しているので、相手に理解できるよう、懇切丁寧に再批判しておく。

七月三日(月)

「新宗教の素敵な神々」に対する日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド、救世軍、沖縄ベテル教会からの質問状に、私なりの回答を書いたのだが、マガジンハウスの回答に私の意見も反映されていることなので、今回は出さないでおく。しかし、相手の出方次第では全面的にやりあうことになろう（注：八月七日現在、一触即発の気配。この経緯はすべて公開する予定なので注目していただきたい）。

某社から創価学会についての書き下ろしの話。相手に不足なし、すごくやりたいが、時間的に無理。残念。

七月四日(火)

ドクター中松について「噂の真相」の取材を受ける。「宝島30」でドクター中松の実態バラシをしてから随分経っていて、今更の話ではあるが、記事の内容次第では、ドクター中松ともやり合うことになるかもしれない。得るものなど期待できないが、あっちが望むなら、倒れるまでやりましょう。もちろん倒れるのはあっちだけどな。オレなんて最初から倒れてるからこれ以上倒れようがない。

七月五日(水)

某編集者からショートカットでの「丸田問題」に関する電話。悪いのは丸田祥三氏でなく別の某氏というが、だとしたら丸田氏がショートカットで弁明なり謝罪すればよいことだ。私もそう望んでますよ、丸田さん。

コンドームの取材で相模ゴムへ。社長じきじきに相手をしてくれ、延々と話込む。

家に帰ったら、ハードスタッフ小西さんより『魔羅の肖像』についての感想が留守電に入っている。これが感想第一号。ありがたい。

七月七日(金)

夕方から月島の廃墟ビルで、天願大介監督『鏡』の撮影。井村昂、小林麻子、元気いいぞう、ジーコ内山などが出演。

七月八日(土)

昨日に続いて撮影。ジーコの演技が最高におかしくて一同笑いが止まらず、幾度もNG。

七月十一日(火)

SPA！編集部内への正式な説明もまだなく、ここ数日、小林vs.宅の件がどうなっているのか見えなくなっていたのだが、本日、複数の人から、ここ数日間の動きや「ゴー宣」終了の話を聞く。最悪の選択としてこの事態を予測してはいたが、カリスマの実態てこんなもん。負けるのだとしても、堂々、公開で論争すれば評価はさらに上がったろうに、完全に失望。カッコわりぃー、みっともねぇー。

七月十二日(水)

小林氏がサピオで「ゴー宣」を継続するとの情報がこれまた複数の人から入ってくる。なるほどね。ご自分のやったことをどう糊塗するのかとくと拝見しましょうかね。

『魔羅の肖像』に登場する女性から手紙。クリトリスへのクンニに関し、大変参考になることが書いてある。喫煙者の舌は荒れているので非喫煙者の方が気持ちいいというのだ。クリトリスで喫煙者か否かを判定できる女として実験させてもらおうかな。

七月十五日(土)

夜、古館伊知郎氏と話し込む。古館氏とはまるっきり面識がなく、仕事じゃなく個人的好奇心で私なんぞに会いに来た。上野文庫で資料を漁ったりもしていて勉強熱心な人だ。

七月十七日(月)

鶴田真由の夢。鶴田真由は彼女の家族の前だというのに手を握ってくる。積極的なんだから。しかし既に会ったことがあるためか、先月の内田有紀のようには妄想が広がらず。

七月十八日(火)

デザイナーの吉原君の事務所にいたら、テレビで保坂和志芥川賞受賞のニュースが流れる。大学の先輩で一緒にミニコミをやっていたこともある人物だ。去年、本が売れないと嘆いていたが、これで売れ行き倍増か。

七月二十日(木)

✖「オゲレツ路線に転換の朱鷺。右は小泉今日子、左は広田玲央名」

昨年「松沢堂の冒険」で取材した大阪の黒田政治氏に電話をしたら、既に亡くなってい た。90歳で週に二回セックスし、珍宝閣なる一大コレクションを築いた黒田氏を紹介した回は私の知り合いの間でも話題になったものだ。いつ死んでもいい歳だったけど、まだまだ話を聞きたかった。

七月二十一日(金)

『Q^2のある素敵な暮らし』のマガジンハウス版『声で暮らす』(仮題/発売は10月)のため、フロッピー版のプリントアウトが送られてくる。ざっと数えたら1700枚もある。こんな長かったか。さっそく削る作業に入る。

七月二十三日(日)

最近遅刻することが無茶苦茶多いが、本日投票にまで遅刻しそうになる。虚しい気持ちはあるけれど、投票くらいしておかないとな。

七月二十五日(火)

タコシェでバイトしてくれていたことのある森平から電話。タコシェで万引し、ニセインタビューをやり続け、「QUICK JAPAN」でも取り上げられたDが、先週、恵比寿のクラブで某誌の名を騙って入ろうとしてボコボコにされたという。現場にいた森平によれば、札幌の実家の電話番号までを聞き出し、その場で電話したそうだ。家族を巻き込んでの騒ぎとなってきた。「QUICK JAPAN」に取り上げられたことにより、ヤツの行動に加速がつくのではないかとも予測していたが、やはりそうだったんだろうか。

七月二十六日(水)

女王様としては珍しくいい乳をした女子大生女王を取材したあとSPA!へ。来週、扶桑社は浜松町に引っ越し、今後は羽田から飛行機に乗る際に立ち寄るくらいしかなくなりそう。浜松町に用事ないもの。

ふと今週号を見たら宅八郎のページが半ページになっている。靏師編集長に「どういうことか」と聞いたら、「外に行こう」と、小林氏について飲み屋で3時間ばかり話し込む。靏師氏はこの一件について公に発言できなくなっているため、私も書くわけにはいかないが、事実経過としては、この間、いろいろな人に聞いていたこととほぼ一致している。『鬼と蠅叩き』にも書いたが、今回の一件は、靏師氏が編集者として当たり前の態度をとっただけであり、小林氏は自ら勝手に逃走したにすぎない(注:この翌週出た「ゴー宣」最終回にはデタラメが含まれている。また、あの通りだとしても、過去の「ゴー宣」や人間性をも疑っていい内容だ。あんなものを掲載する靏師編集長は偉い)。

七月二十七日(木)

深夜まで『鬼と蠅叩き』の青焼きチェック。『魔羅の肖像』を翔泳社から出さないかと正式に申し込まれるが、来年の春以降になるというので、留保する。来春以降は、本を当面出さず(例外あり)、商業誌の仕事も減らし、「ショー松」とさるすべりのフロッピーで300枚から500枚程度の原稿を最低5本ほど書こうと思っている。長いものを書きたくて書きたくてストレスが溜まる一方だ。

七月二十九日(土)

四谷・上海ヌードルにて鳩を料理してもらう。鳩もうまいが、ここのプリンは無茶苦茶うまい。そのあと「ヤンナイ」の取材で逆性感マッサージ見物。男が女の客を揉んだりなめたり入れたりするのだ。けっこう客が来るというから驚いたもんじゃございませんか。

夜、広田玲央名から結婚後初めて電話。こういう女を女房にすると大変だろうが、こういう女に一旦ハマると抜けられなくなる気持ちはすげえよくわかる。吹越さん、苦労するかもなぁ。でも、それがまたいいんだよなあ。

七月三十日(日)

SPA!の特集で、京都の推理作家、柴田よしき氏と対談。こういう人とは縁がなく、て穏やかに話が進み、予定を大幅にオーバー。話が合わないのではないかと思ったが、至って穏やかに話が進み、予定を大幅にオーバー。急いでタコシェへ。パソコン雑誌の取材などいろいろ約束をしていたのに大幅に遅刻。

夜、朱鷺の誕生日パーティ。久しぶりに小泉今日子、天久聖一らに会う。広田玲央名もあとからやってくる。お下劣嫌いのハズなのに、朱鷺は新境地を狙っているのか、「オマンコ」「オチンコ」「ヒダ」など季語(?)を詠み込んだ俳句(?)を連呼、これが延々数十分も続いて一同唖然。お下劣な私でさえついていけず、天久と「ゴー宣」問題について真面目に語り合う。

素直なキョンキョンは朱鷺の言葉の意味をいちいち考えて、ああでもない、こうでもないと、ブツブツ言っているが、酔っ払いのマンコ発言に意味なんてねえっす。

七月三十一日(月)

伏見憲明氏から電話。8月に横浜である世界性科学学会に行かないかとのお誘い。参加料金がバカ高いが、この夏は古本即売会以外どこにも行く予定がないので、バカンスとしてチンマン問題を考えに行こうかと思う。

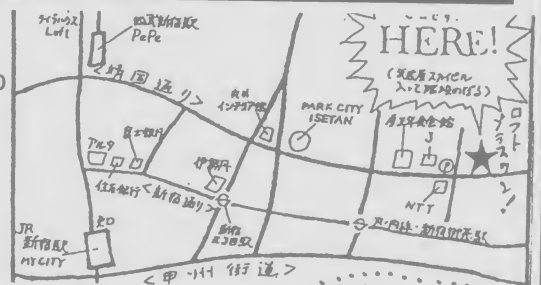
Vol. 18

〒151 東京都渋谷区初台1―47―1
小田急西新宿ビル8F
(株)青林堂・内
ガガガ新聞社
ガガガインフォメーション
電話 03・5378・4128
編集発行人／園 子温

ガガガ五千人計画大発動!!

年末の東京ガガガ一万人計画への布陣をしけ!!

全共闘世代

★9月8日（金）
●場所＝新宿ロフトプラスワン ☎03 3357·2980
●時間＝夜8時
●パネラー＝園子温（東京ガガガ）
＝鈴木邦男（一水会）
＝三上治（評論家）

戦後50年総括!!

60年代までだか70年代までだか、その尾っぽの80年代までだか、忘れたけれど、ある時まで、〝若者×群衆〟という「絵」があった。否、正確にいうと、よく知っているかんじがする、見飽きた記憶がある、と言った方が正確だ。ぼんやりと覚えているその構図は、サラリーマンとか、まあいわゆるしゃきっとした大人達の歩き去っていく道端で、若者が一人、うなだれて立っている、もしくは座りこんでいる、という「絵」だ。映画でか、MTVだか、写真でだか、とにかく見飽きてるくらい見てきた気がする、〝赤ずきんちゃんが気をつけて歩く夜の新宿〟から、シド・ビシャスまで確かあった。

この「絵」は90年代ではカッコワルイとされている。カッコつけすぎていてカッコワルイ感じがするのかもしれないけれど、まあ、今はたいていの若い奴は、このくらい知っている「若者も群衆だ。」と。青春も群衆にすぎなかったと。入学写真から卒業写真まで、いつも四角い構図いっぱいに満員の若者がぎっしり並んで微笑んでいる、山のキャンプ場、海辺、歩行者天国、でピースサイン。それは毎日の通勤快速でギッシリ乗り込んでくる満員の群衆と変わらない。若者も満員なのだ。孤独だって満員さ。縦横何センチの卒業写真に並んだ群衆という名の若者たちが、数年後に、縦横何メートルの通勤快速の長方形に移しかえられただけの事だ。そんなこと否定的に考えるのにも飽きた。そんなもんなんだ。誰が、一体、誰がこの縦横何センチの箱から自由になれるというのだ、なれるはずはない。共同体が箱なのか、箱に詰められた途端、そこが共同体となるのか?

俺は今、この原稿を、縦二メートル、横五メートルの箱の中で、これを書いている。このあと、別の箱に乗って、別の箱に移動する。俺の顔らしきものがあったところには、群衆がべったりはりついていて、いったいどこからが群衆の顔でどこからが俺の顔なのかなんてわからない。公衆便所はクソッタレだ。公衆便所の公衆洗面台の前の公衆鏡に映しだされた俺という群衆。それも今日、やはり否定するほどのことではない。そういうものなのだ、俺は群衆なのだ。群衆は決して俺ではなかったのに、俺は群衆になっていた。はりついたものは、はがせない。「自分だけの信念」なんていう、キャッチコピーなんて印刷所で今日も百万部刷られたし、百万部売れた。百万人の読者が「自分だけの人生を生きよう」なんて安手の腰巻キャッチコピーにひかれて、「自分の意志」で読みだしている。昔、オスカー・ワイルドという劇作家が、「砂鉄は自分の意志で磁石に疾走したのさ」というコントを書いたけれど、その程度の事さ。今日も、俺は自分の意志でこの文章を書いている事になっている。「政治家なんてタテマエで、ぎっしりだ」なんて昨日ラジオでDJがほざいていたけれど、「じゃあ、てめえはホンネでぎっしりじゃねえか」と言ってやる。本音吐こうが所詮、群衆の本音じゃねえか。「町を明るく、いい町づくり」なんていうタテマエも、「いや実はね、あの娘とSEXできたら、なんてねー❤」なんていうホンネも変わりない。「町を明るく」もできねえし、「あの娘とSEX」もできねえだろう。

実行とは関係ない。ホンネもタテマエもできなきゃ同じ事。昔、見たはずのあの「うなだれた若者が群衆の中に立ちつくしている」

紋切り型の青春の構図は、ホンネとタテマエの間で、実行できずにうずくまっている図だった。今はどうだ、そんな恥ずかしい構図、若者だってハズかしい。だって90年代は、まったく悩まずに、ホンネか、タテマエのどちらかに素早く加担して、騒いだ方が楽だし、カッコイイし、孤独じゃないし。

そのあとの絵がどう動いたかは、君が目を閉じればよく知っているはずだ。人でごったがえす町角に、その若者は立っているだけじゃなく、走り出したりしたのかもしれない、何かを指さして見つめたりするのかもしれない、恰好良くスローモーションで駆け出したりして、白黒の粗い画面でさ、でもその走る方角も、指さしたその視線のむこう側も、見せられないし、知っちゃいないのさ、だってただのホンネ対タテマエだもん、大人対若者なんてそんなもんだもん、実行じゃないもん、走るなんて、見つめるなんて、指さすなんて実践じゃないもん、ただの本音だもん、カッコつけるなよな、せめて見えないという事を見つめろよ、見苦しくさ、思いっきりださく。何が何だかわかんねーという事を実践しなきゃ。見えてるフリばかりしてんじゃねえよ。見えてるフリは死んだフリ。死んでばかりじゃいけません。

95・8月

TOJIMA劇場

とうじ魔とうじ

連載第14回

歯の話

今月はカミングアウトさせてもらう。今まで誰にも言わなかった僕の身体上の秘密、初めて告白します。実は、実はオレ……**入れ歯なんだー!!**

あー、ついに言ってしまった。今までよく他人から「とうじ魔さんてホント歯並びいいですねー」なんて言われるたびに「そ、そうですかー」とか言いながら内心、良心の呵責に耐えていたのだ。当たりめーだよ、本当の歯じゃないんだから。あーこれでスッとした。

僕の場合、入れ歯ったって1本や2本ではない。総入れ歯ではないが、上の前歯9本、つまり普段見えている部分の殆んどだ。取り外しはできず、両サイドの歯がブリッジを固定している。要するに、外見は一本一本別れた普通の歯に見えるが、実は9本は繋がっていて歯と歯の間に隙間はないのだ。だから僕は食事をしても、歯と歯の間に食べ物がはさまるという心配はない。だがそのかわり、歯と歯茎の間に物がはさまることがあるのだ。これはちょっと体裁が悪い。例えばレバニラ炒めを食った時なんか、歯の前後にまたがってニラが歯と歯茎の間を貫通してしまう場合がある。これを爪楊枝で歯の内側からほじくると、今まで前歯にぶら下がっていたニラがスルスルと歯茎の中に消えてゆくという、普通ではあり得ない現象が起こってしまう。もし他人がこれを見たら、さぞかし不気味だろうな。

いつから入れ歯になったかというと、中学3年の15歳の時からだ。15歳という若さにして、残りの人生は入れ歯人生と宣告された時のショックはそうとうなもんだった。僕はある事故で前歯を折ってしまったのだが、事故の痛みよりも、中学生で入れ歯になるという精神的ショックの方が遙かに大きかった。それは20代でハゲた時、よりもだ。しかも僕は勉強といい体育といい何のとりえもなかったが、歯だけが唯一の自慢だったのだ。僕はムシ歯が一本もない生徒として、校長先生から表彰されたことがある。僕のこれまでの人生で賞状をもらった経験といえば、ムシ歯がないことと、ある遊園地の巨大迷路を短時間で通り抜けた時くらいのもんだ。しかし、どっちもたいしたもんじゃねーなー。

その事故というのがまた、情けない。交通事故ならまだ同情も買えるだろうし、ケンカで前歯を折ったとゆうなら武勇伝にもなる。ところが原因が鬼ごっこでは、何ともカッコがつかない。厳密に言うと「手つなぎ鬼」をして遊んでいる最中に人とぶつかって歯を折った、ことになっている。だが、これも真実ではない。本当はラグビーをしていて折ったのだ。まあラグビーと言っても、休み時間に屋上でやっていたラグビーごっこに過ぎないのだが。僕のクラスの男子はたいてい、昼休みは校舎の屋上に行きラグビーごっこに興じていた。本当は屋上での球技は禁止されていたのだが、ナイショでやっていた。ある日そのラグビーの最中、悲劇は起こった。S君の頭が僕の顔の下半分、つまり口のあたりに激突したのだ。僕は右手で口を押えながら猛烈な痛みに耐え、立ち尽くしていた。S君は頭を抱えうずくまっている。「大丈夫?」他の生徒たちも皆心配そうに走り寄って来た。だがみんなの心配は一方的にS君の方に寄せられていた。S君を覗き込むと、額が割れ血が流れていた。「大変だ!血が出てる」と、みんなは大騒ぎ。額から血を流しうずくまっているS君と、口を押えて立っているだけの僕とでは、どう見てもS君の方が重傷に見える。何だか僕は、加害者意識におそわれて「ごめんねS君、大丈夫?」などと言いながら肩を貸し、S君を医務室まで

TOJIMA劇場

運んだ。左肩ではS君、右手では自分の口、を押えながら僕は廊下をヨロヨロと歩いた。僕自身もそうとうの痛みなのだが、痛いだけでケガをしているとは思っていなかった、最初は。だが廊下を歩いて行くにつれ、今僕の口の中は大変な状態になっているのでは?と次第に気づき始めた。なぜなら血があふれてきたからだ。僕は口を閉じ、更に上から手で押えているというのに、指と指の隙間から止めどなく血があふれ出てくる。いったい僕の口の中で何が起こっているというのだ、僕はそれを知るのが恐ろしくなってきた。

それでも僕はどうにか、医務室まで辿り着いた。S君を医務の先生に引き渡し「責任」を果たすと、僕は医務室の流し台に駆け込んだ。初めて手を離し口を開けた。大量の血とともに何本かの歯が流しの中に落ち、カラカラと音をたてて転がった。その時僕は初めて歯の長さというものを知った。それまで僕が見ていた歯というのは、歯茎から生え出たほんの一端で、歯茎の中にはまだ何cmもの根が埋まっているものなのだと。流しにはニューッと長く根を伸ばした歯が何本も落ちていた。

その直後、もう一人の男子生徒が医務室に運ばれてきた。一緒にラグビーをやっていた、クラス一気の弱いK君だ。K君の顔面は蒼白。なんとK君は、僕とS君がぶつかる瞬間を目の当たりにし、僕の口から何本もの歯が飛んで行くところを目撃して、気分が悪くなったと言うのだ。

僕はそのまま歯医者に運ばれ、入れ歯生活の生涯を宣告された。S君はというと、2~3針縫って数週間で完治した。翌日学校へ行くと担任の女教師に「塔島君(僕の本名です)、昨日は大変だったわね。それにしてもまた、なんで屋上で手つなぎ鬼なんかしたの」と言われた。僕は何のことやらさっぱりわからず「エッ?手つなぎ鬼??」と聞き返した。するとクラス中の男子がいっせいにコホン、コホンと咳払いを始めた。そして「そうだよ、なっ塔島。俺たちみんなで手つなぎ鬼してたんだよな」と言う。僕はようやく事情が飲み込めた。禁止されているラグビーで大ケガしたとなると先生に怒られるので、みんなは口裏を合わせて鬼ごっこということにしていたのだ。「そうなんですよ。手つなぎ鬼でぶつかっちゃって」僕も同調した。それにしても言い訳が幼稚すぎやしないか?中3の受験生だぜ、鬼ごっこなんてすっかよ?しかも大ケガするほど必死になって、なんか俺、バカみたいじゃん!数日後には全校朝礼で、校長先生が「先日、3年生のある生徒が**鬼ごっこ**をしていて大ケガを負いました。みなさんも事故には充分注意しましょう」と訓示をたれた。立つ瀬ないっス。

あの事故から約10年後、26歳の時入れ歯が取れて使えなくなり、大金をかけて新調した。80万円近くかかったかな。歯医者は言った。「これで当分は大丈夫」「当分?当分ってどれくらいですか?」「まあ最低でも10年はもつでしょう」。10年後といえば俺は36歳、36歳といえばもうジジイだ。その頃また入れ歯が取れて歯無しになっても、もう外見を気にするような年齢(トシ)じゃないな、と26歳の僕は思った。それに36歳なんて永遠に来ない遠い未来のようにも思えた。

新しい入れ歯は快適だった。僕は歯のことは気にせず、これまで普通にくらしてきた。まあ気にせず、とは言っても、前歯で固い物を噛まないようにはしているし、歯が折れる悪夢でうなされるという後遺症もあるのだけれど、一応快適だった。ところが今年の正月、家で宅配ピザをとって食べた時だ。ピザの端っこの固い所をかじったとたん、入れ歯の一本が欠けた。ん?俺は今何歳だっけ?…36歳。歯医者が言った通りじゃないか。でもまだ、やっぱ外見は気にするわなー。

本文に写真がない時のみの穴うめ新企画

シリーズ 楽屋百景① 文芸坐ル・ピリエ

女性ダンサーに囲まれる筆者(91・1)

高杉弾

いい女に会わせる、と云ふのだ。
都心には珍しや。しもたや風に寂れたその店の暖簾をくぐるとかすかに金木犀が香り、しかし店内は意外なほど手入れがいき届いて驚くほどの美しさ。
奥の座敷にすでに席は用意され、担当編集者の傍らにはそれまで写真でしか見たことのなかったその出版社の社長がなにやら大声で談笑しながら胡座をかいているではないか。
季節の話題、味覚、そして共に闘いし六十年安保時代のそれぞれの思ひ出と郷愁を語るでもなく語っているうちに、背後に襖の開く音がして、和服姿の女性があらわれた。
金木犀の香りがくっきりとわが鼻孔に感じられ、彼女の襟足はもう私のすぐ鼻の先にあった。
私が短篇小説を発表していたその文芸出版社の社長によって正式に紹介されることとなったその女性、齢およそ二十八、九。わが尊敬する野々村草庵先生の孫にあたるといふ端正な顔立ちのまぎれもない美人。私は思はず陰茎が半立ちとなるのを必死に抑えての鰻三昧、そして美味窮まりない地酒、肴の宵。
聞けば彼女の専門はラテンアメリカ文学、その外見の清楚なたたずまいとの落差に、私はなにやら奇妙な興奮を禁じ得なかった。
そしてめくるめくその夜。
いかなる段取りにての展開であったかは記憶おぼろげなれど、有体に申さば、すなわちわが陰茎はあたかも鉄筋コンクリートの如く固く屹立してわが尊敬する野々村草庵先生の孫にあたるといふ端正な顔立ちのまぎれもない美人のほほほ本気汁でしっとりと濡れそぼる股間の奥襞に挿入され、圧迫され、摩擦され、吸い尽くされた。
私のぼぼぼ勃起した陰茎に流れる血潮はまるで高鳴る半鐘のようにどっくんどっくんどっくんと波打ち、忍び泣くように漏れる彼女の声と金木犀の香りは、深まりゆく秋とやがて来る美しき冬、そしてその次に来るであろう春と夏の季節の到来を次々に私に告げているかのようであった。
それから五年後、私は『無人島の国語辞典、そのひそやかな告白』によって芥川賞を受賞することができ、麹町の鰻割烹で初めて出会いしその女性は、いつしか拙宅の台所に立つ人となった。
落ち葉の舞い散る停車場の秋の黄昏、銀色の世界がわが老いたる脳髄までを無情に凍らせる真冬の深夜、淫乱の花が狂わんばかりに咲き乱れる春の野辺、焼きつけるような陽射しがわが視床下部をじりじりじりと焦がす真夏の白昼。
ひまわりの花は太陽時計、鯰は大地の怒りを人々に告げる自然界の地震計、猫が顔を拭いたら明日は雨だ､鴉が鳴くからもう帰ろう。
嗚呼、人生は回り舞台。濡れることもあれば固くなることもある。大麻を吸えば気持ち良くなるし、お金が儲かれば買物もしよう。眠くなったら蒲団に入り、目が醒めたら起きて顔を洗う。博打もするしせんずりもする。だがしかし、それがいったいどうしたと云ふのだ。
私はいったいどこから来て、どこへ往こうとしているのか。
あの金木犀は記憶の彼方、女房はすでに他所の男に走った。
日々是れ流されゆく季節のうつろい、記憶の彼方、幻の風景。こうして今年も暮れてゆく。明日もきっといい天気だ。

担当・添島末吉氏へ
この原稿は本年末刊行予定の文春文庫に収録の予定なり。慎重に校正されたし。
榎本拝

「ガロ」編集部より
この原稿は芥川賞作家榎本孝三氏が『オール讀物』10月号に寄稿予定の連載エッセイが間違って青林堂にFAXされ、当編集部のミスによって掲載されてしまったものです。詳細に関しては現在高杉弾氏とともに調査中です。榎本孝三氏ならびに文藝春秋社に深くお詫び申し上げます。

CLUB IRREGULARS

text: DAN TAQUASUGUI

graphicks: HÉIQUITI HARATA

つい二、三日前にはらはらと散りゆく桜の花びらに諸行無常の季節のうつろいを感じたかと思へば、もう夏の盛りを過ぎて秋の声を聞く季節となった。

テレビの天気予報からは昨年までは聞いたことのなかった「木枯し１号」などという言葉が流れ、下手をするとこの原稿を書いている今頃はもうクリスマスを過ぎてぎりぎりの年の瀬やも知れず、掲載号が世に出るのは正月明けの一月下旬、もう春も目の前、そろそろ梅の蕾が膨らみはじめるやも知れぬといううっとうしい梅雨の季節かも知れない。

もう夏はすぐそこまで来ている。古人曰く、夏きたりなば、秋遠からじ。

古いローライフレックスを首からぶら下げて、いつの間にか日課となりし目黒三田、恵比寿界隈の散歩。

道路には車輪をくるくる回しながら走りゆく鋼鉄製の車輛がいくつも往来し、子供らの泣き叫ぶ声、近くを走る省線の轟音、そして頭上にはゑびすビール工場跡地に新たに建てられし高層ビルの偉影がそびえ立ち、あわやパンツも見えんばかりのミニスカートに腰を包んだみめ麗しき淫乱淑女の方々がカフエーにて珈琲などを召し上がっておられる。

しかしそんな喧噪に混ざりても、この都会の片隅を飛び交う小鳥たちのせんずり、いやさえずりもまた健在と見える今日この頃。

嗚呼、うつろいゆく日々、流されゆく記憶。

いまから二十年前、まだ駆け出しの小説家であった私は当時世話になっていた担当編集者の呼出しを受けて麹町の鰻割烹へ出かけて行ったことがあった。

流されゆく日々の記憶　連載・第九回　榎本孝三

四方田犬彦
連載第91回

VOLUME91

レタスと沢庵

七月一日

久しぶりに『泥だらけの純情』を見直す。浜田光夫が吉永小百合にピーナツを半分分けてやって別れる駅は京浜東北線の上野だと思っていたが、よく見ると東横線の渋谷だった。「アメリカの白の女は絶対にニグロと寝ない。体臭が違うからだ。わかるか。沢庵をなまっかじりしている奴と、レタスに塩ぶっかけて食っているやつじゃあ、体の臭いからして違っているってわけよ。」小池朝雄のヤクザの兄貴分が駆け出しの浜田に、アルジェリア大使令嬢の吉永小百合を諦めさせようとしていう科白である。浜田が死に、その野辺送りがお化け煙突を背に、夕暮れどきの荒川の土手を過ぎるシーンでこのフィルムは終わるのだが、60年代の日活はメロドラマにおける社会階層の差をここまで生々しく描いていたのだ。のちに友和・百恵で撮られたリメイクでは、このあたりはどうなっていただろうか。これは初日に見にいっているのだが、よく覚えていない。映画だけは一回見ただけではわからない。自分の抱えている問題意識に応じて、何度も見なければならない。

七月四日

口髭を少し伸ばしっぱなしにしていたところ、朝、鏡に写る自分が、子供のころの読んだ桑田次郎の漫画に登場する悪人にあまりにそっくりだと知る。さっそく髭を剃る。

七月六日

ルーマニア生まれの哲学者シオランが6月の終わりに84歳で死んだと知る。2月にポール・ボウルズに会ったとき、彼が『徒然草』を読んでいるところで、シオランに似ている。彼とぼくとどっちが年上かなあ、といっていたことを思い出した。最後の著作『告白と呪詛』のなかには、人間の個性などというものは、その人間の悪臭のようなものだ、という一節が見られる。にもかかわらず、あえてこの言葉に逆らっていうならば、シオランは真に個性的な哲学者だった。彼はニーチェでさえも人間を遠くから見過ぎていると、批判したのだ。

七月八日

赤坂に移ったアセアン文化センターでリノ・ブロッカについて講演。その準備のために1か月ほどのあいだにフィリピン映画のヴィデオを10本ほど見たわけだが、儒教も仏教もないと人間はこれほどまでに明るくなれるのか、というのが第一印象。戦前はアメリカが本格的にアジアのハリウッドを建設しようとしたマニラは、いまでも強い映画的磁場である。内藤誠と再会。彼は長いマーロン・ブランド伝を翻訳したばかりだ。

やまだ紫より『やま猫人生放談』落掌。こんなに論理的で納得のいく人生相談も珍しいと思う。

質問。当方は一人暮しの男性。旅行などで家をあけること頻繁。つねに多忙。にもかかわらず犬を飼うには、どうすればいいでしょうか。「子犬を連れた貴婦人」を探すというのも以前考えたことがありましたが、どうも東京では難しそうなので……。

七月十一日

ワシントン州立大の小林元雄教授が来る。来年春にハワイで開催されるアジア学会で、70年代の日本映画におけるジェンダーの問題というパネルに参加しないかと誘われるが、どうも香港映画祭と予定が重なるらしく辞退する。英語圏の日本映画研究家は最近ラカンとかフェミニズムとか、理論ばかりを口にするが、そういう学生にかぎって基礎的な資料を読む日本語能力がなくてねえ、と小林さん。東京だって似たようなものですよ、とぼく。だいたい昔から、翻訳を読みかじって最新流行の理論を振り回す学生ほど、語学ができなかったりしたものだ。そして付け焼刃の理論はすぐにメッキが剥げてしまい、また別のものを持って来て、気忙しく間に合わせなければならない。テクストの形態論的な分析で学位を取ることが流行するのは、大学が林立して、充分な資料もないままに研究を行なうには、それがもっとも安上りで、出来栄えにムラがないからだと納得する。批評のモードと大学行政との関連が、ここから浮かび上がる。もちろんこう書いたところで、シクロフスキーの偉大さを軽減することにはなるまい。

井上章一の『狂気と王権』を読む。要するに戦前戦後の皇室ゴシップの分析だ。裕仁を退位させて高松宮を皇位に就かせよという霊のお告げを信じ、それを広めようとした元女官の話に始まり、大正天皇が摂政を置くに当たって、マスコミで彼が幼少時に患った脳膜炎についてどのような説明がなされたかなど、面白いことかぎりなし。書物の中心にあるのは不敬罪という、戦前の罪状が本質的に孕みもっている矛盾である。日本人はすべからく天皇家に対して敬意を抱いているはずである。もし、これに従わない者がいたとすれば、その者は論理的にいって精神

が異常でなければならない。簡単にいえば、狂人である。狂人は心身喪失状態にあるため、罰することができない。ということは、仮に天皇家に対して無礼を働いた者がいたとしても、それを罰することができないという理屈になる。では、不敬罪が消滅した戦後社会では、状況はどう変化したのか。井上が取り上げる例はいずれも面白い。もっとも60年代のあるときに精神科医であり、井上の著作にも言及されているミッシェル・フーコーの翻訳者の神谷美恵子が、当時の皇太子妃であり、心身ともに疲弊していた美智子さんに何を示唆したかという話は、書かれていなかった。

七月十四日

有楽町の炉端で清水徹、和田忠彦、渡部直己と会う。清水さんは最近吉田健一の評伝を書こうとしていろいろ調べものをしているうちに、彼が父親の茂についてどれほど深いアンヴィバレンツを抱いていたかが、よくわかってきたという。ひどく呑んだあとで、渡部の提案で、明治以後はこのひとりだけでいいという、究極の小説家は誰かという話題になる。言い出しっぺの渡部は谷崎。ぼくは鏡花。清水さんは、多少の留保を認めた上でと前置きしたのち、荷風。和田は微笑して答えず、「カルヴィーノとタルホ」というエッセイのコピーをくれた。

七月十八日

パゾリーニの評伝をなんとか出版したいという女性編集者と話していて、彼女の友人の勤める出版社が社員旅行ごとに日本各地の「秘宝館」を探訪しているという奇怪な話を聞く。こないだは熱海に行ったらしい。60歳の女性が裸で出てきて、秘所にナイフを挟みこみ、いろいろなものをチョン切ったり、さまざまな芸当を見せるのを目の当たりにして、人生に対する考え方がすっかり変わったようだ。四方田さん、今度ちゃんと場所を聞いてくるから、ぜひ「秘宝館」行きましょうよ、と誘われる。なんだか坂口安吾のエッセイにでも出てきそうな話だ。

なんのことかさっぱりわからず帰宅すると、保坂和志が芥川賞を取ったという知らせがあった。ただちに経堂の彼のうちに電話したが、記者会見に出かけていたのだろう、留守だった。今年になってから身近に聞く初めての朗報だ。保坂は数年前に『プレーンソング』を発表したとき、ぼくは独自のリズムと戦略を持っている作家だと思い、その年のベスト1に選んだことがあった。本人はゴダールに影響を受けたとか、どこかのインタヴュウで語っていたが、どこまでいってもいっこうに話が起伏を迎えない不思議な小説だった。このごろ顔が似ているというんで、よく村上春樹と間違えられるんですよ、といってたが、賞をもらっても同じことをいわれるのだろうか。

七月十九日

海上雅臣のところで井上有一が55年前の大宣言の前に制作していた作品を見せてもらう。世に出るのはこれがはじめてらしい。ミロやクレーを思わせる絵画的なものあり、自室の擦り切れた畳のフロッタージュあり、彼が書道家として知られる前に実に多くの実験を行なっていたことがわかる。とりわけ荘子、それに恵子（中国の詭弁学派）の言葉を用いた書に面白いものがあった。そのあと包正でコロンビアから戻ってきたばかりの高橋睦郎と落ちあい、華族から財閥、俳人までのさまざまなゴシップを教えられる。

高橋さんからコロンビアで彼の朗読と講演を伝える新聞を見せられる。見ると、大きな彼の写真のすぐ隣に、これも大きく生首の写真が載っている。三島由紀夫である。ぼくが三島さんの話を講演でしたからでしょうけど、それにしてもこの写真は見たことがない、と彼はいう。たしかにぼくも見たことがない。写真の首の下には「1」と書いた紙が置かれていて、どうやら警察の鑑識で撮影した写真が流れたものだろうと想像する。日本ではとうてい公開できない写真だろうが、コロンビアにまで流れているとは、これは相当に広い範囲に知られている写真かもしれない。あの事件のとき、怒り狂った自衛隊員たちは生首を蹴飛ばして憂さを晴らしたという。話はマヤでかつて人間の生首を用いて、サッカーのような競技が行なわれていたというふうに移る。

ILLUSTRATION by YAMADA Murasaki

お答え

一人暮しで留守がちの人は犬を飼うべきではありません。犬は恒常的な孤独に耐えられる生き物ではありませんし、飼ってからこの事を痛感したあなたの心の負担を取り除いてくれるのは犬の死くらいのものしかありません。

以前日比谷の地下コンコースで幾冊もの本を抱え、足早に脇目もふらず行くあなたとすれ違った事がありますが、あの人生の歩き方は犬の散歩には不似合かと想いうかべます。

今すこし気力と体力が衰え、居を定めた時こそ犬は男の親友となる様です。その日をお待ち下さい。

紫拝

「にもかかわらず」じゃありませ〜ん

清水宏といっても、いまでは知る人は少ないだろう。名前ぐらいは聞いたことがあっても、作品の題名となると、さて、何だったけという人が多いのではないか。まあ、手っ取り早く知るには、キネマ旬報社から出ている『日本映画・テレビ監督全集』を見ればいいが、それによって清水宏が、小津安二郎と、生まれたのも同じ一九〇三年なら、亡くなったのも六六年で小津の三年後、松竹蒲田への入社では小津より二年先輩という、同世代作家というよりはもっと近いところにいた人だったということはわかるが、だからといって、それで清水宏という映画監督のことを知ったというわけではない。ちゃんと知るには、まず何よりもその作品を見なければならない。

と、まあ、エラそうにいってはみたものの、わたしだって、ほとんど何も知らなかったのだ。実際に見たのも、戦後の『蜂の巣の子供達』とその他二、三ぐらいで、むしろ映画について文章を書くようになってからは、その存在をすっかり忘れていたのである。それが、昨年だったか、山田宏一さんに、清水宏は面白いよ、とくに一九三〇年代のやつは傑作！と教えられ、ビデオまで貸して貰ったことで、やっと、いまになって清水宏の面白さを知ることになったのである。そのわが先達・山田宏一が、今年から『ユリイカ』に連載を始めた「新ビデオラマ―もう一つの映画館」の六回目（六月号）から三回にわたって「清水宏を見る」というのを書いているので、この文章を読んだ人は、すぐにそちらを読まなければいけない。そうすれば清水宏の多面的な魅力が、もっとずっとよくわかるはずだ。

ともあれ、そんなふうにして、わたしが最初に見ることができた作品は、一九三六年（昭和十一年）の『有りがたうさん』だったが、これには仰天した。あの頃に、こんなふうに撮っている人がいるのか、と心底驚いたのである。話は簡単で、伊豆の小さな港町から鉄道のある町（おそらく修善寺であろうと、伊豆の人に聞いた）まで、天城街道をゆくバスの運転手が上原謙で、彼は、荷車が道をよけたり、道路工事の人が道をあけてくれると、そのたびに「ありがとーう」と声をかけるので、「有りがたうさん」という渾名がついているのだが、そのバスに乗り合わせた人たちの人間模様と、途中で、上原謙の「有りがたうさん」に用事を頼んだりする人の話だけで一編が出来ているのである。山田さんによれば、ジョン・フォードの『駅馬車』などと同じように「動くグランド・ホテル形式」とでもいうべいこういうスタイルを、清水宏は好きだったようだ（ただし、この作品は『駅馬車』より前に作られている）。

しかし、わたしが、あの時代に、こんな作品があったのかと驚きもし、感動もしたのは、バスのなかから外を撮ったり、バスの後ろに子供たちが取り付いたまま走ってゆくところを撮ったところだ。実際にオール・ロケーションで撮影したらしいが、カーブした道を走るバスから下を流れる川を撮ったところなどは、その風景ともども、そのとき吹いている風や、その風に揺らめく木々の葉や、そこにきらめく光など、いわば、一九三六年の、この日の光と風と空気の感触を見事にとらえているのである。山田さんは、清水の一九四一年の『簪（かんざし）』の温泉郷の風景について、「ジャン・ルノワール監督の『ピクニック』やエリック・ロメール監督の『木と市長と文化会館』を想起させる木々の息吹き、枝々のゆらぎ」と書いているが、それは、まさにこの『有りがたうさん』の場合も同じなのだ。キャメラを外に持ち出したときの清水宏は、本当に凄い（いや、実は室内を撮るときもなんともうまいのだが）。

おそらく、一九三六年の特にどうということのない何日間（この年には二・二六事件などもあって、いわ

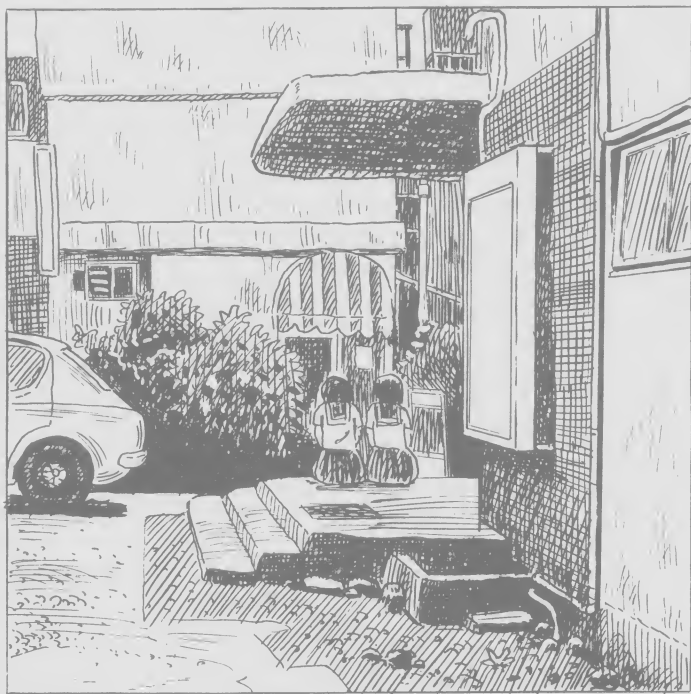



illustration:KAZU YUZUKI

上野昂志の
黄昏映画館

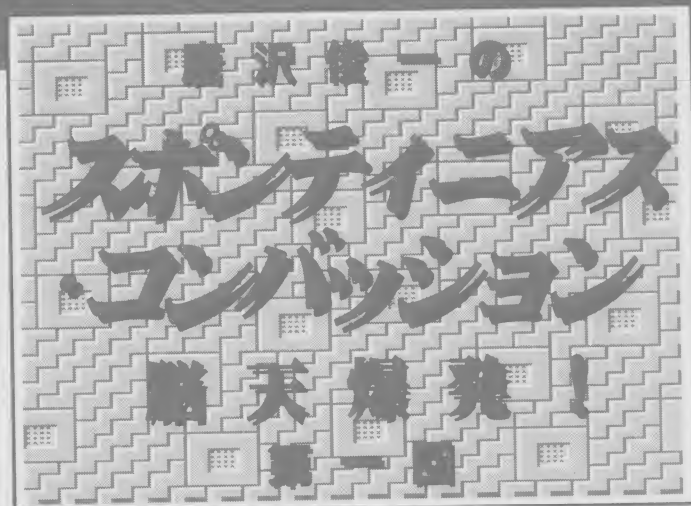
イラストレーション／ユズキカズ

ば歴史を大文字化する特権的な日もあったのだが、そんな日と関係のない日々）の光や空気を、いま現在に触れることができるのは映画の功徳であり、それも清水宏のような作家がいたためである。そして、ルノワールの『ピクニック』もまた、同じ年のパリ郊外の水のきらめきや、木々を揺らす風のそよぎを、いまここへと運んでくれるのである。

だが、わたしが、この映画でもっとも感動したのは、次のようなシーンだ。それは、峠をゆくバスが、白い服に身を包んだ女や男たちを次々と追い抜きながら（むろん、そのたびに上原謙の「ありがとーう」という声が響く）、やがて天城峠のトンネルの入口にさしかかって、そこで、しばしの休憩をする。乗客たちがバスを降り、東京に身売りをする娘が、ほのかな想いを上原謙に寄せ、上原も彼女に心を寄せながら、互いにどうしていいかわからないまま、峠の彼方に向かって石を投げるのだ。このときの、峠の際にある木々に射す光や、かすかに揺れる葉末、そこに向かってゆっくりと石を投げ続ける動作をとらえたキャメラが素晴らしい。そして、やがて先を急ぐ乗客の声にうながされるようにして、客たちがバスに乗り、最後に上原謙がバスのステップに足をかけると、「ありがとーさーん」という声がして、いま通り過ぎてきた峠の道のほうから、さっき追い抜いてきた白い服の群のなかから背中に荷物を負った一人の女が駆けてくる。女は、道からちょと高くなった木の根方に背負ってきた荷をおろし、「ありがとうさん」のところにやってくるのだが、そこで、彼女の着ていた白い服がチマ・チョゴリであることがはっきりする。そのとき、女のほうから話し始めたのだったか、それとも、「ありがとうさん」の上原謙のほうから「もう、行くのかい？」と問いかけたのだったか忘れてしまったが、とにかく、女は、道路工事が終わったので、これから長野のほうに行くといい、お父さんをここに残していくのはかわいそうだけどといって、「ありがとうさん、時々でいいから、お父さんのお墓に花を上げてね」と頼むのだ。おそらく、彼女の父親は工事中に事故か何かで死んだのだろうが、それに、上原謙が、なんとも優しい声で「うん、きっと上げてあげるからね」と答える（わたしは、それまで上原謙を好きだったことはないのだが、このときの優しい調子には感動した）。この二人のやりとりは、バスのステップのところで交わされるのだが、そのときの朝鮮人の女の顔に射す光と、その背後に揺れているすすきの得もいわれぬ輝き。もう、それだけでこちらは、胸が熱くなっているのだが、それに続く女の、「わたしたちが作ったあの道路を、日本の娘さんの晴れ着を着て、一度歩いてみたかったけれど、ダメなのね」という意味のセリフを耳にしたところで、もう我慢ができず、こらえていた涙がわっとばかりに出てきてしまった。

昭和十一年に、点描とはいえ、こんなふうに朝鮮人の女を描くことのできた清水宏って、何なんだと思ったのである。あのバスの道中で、いろいろなタイプの人間を出したほうが、バラエティーがあっていいというのは当然の計算だとしても、しかし、朝鮮人の女を、こんなふうにわずかなセリフから彼女たちのそのときの境遇がわかるように出すというのは生半可なことではない。しかも、それをただ言葉として出したというのではなく、撮影しているその時その場の空気を丸ごと掬いとるようにしてフィルムに定着しているのが、なんとも素晴らしいのだ。岸松雄は、かつてそれを「実写精神」といって称揚したらしいが、清水のそのような外界に対する繊細な感受性が、それを可能にしたのだと思う。

これは、レニ・リーフェンシュタールなんかの映像美学的な映画の撮り方と、ほとんど対極にあるものといっていいだろう。いわばレニは、世界を美学的に再構成するものとして映画を作っているのに対して、清水宏は、あるがままの世界の肌理に触れようとして映画を撮っているのだ。これは、おそらく、ヌバを撮ったときのレニのビデオと、このときの朝鮮人の女に対する清水の演出の違いを比較してみればはっきりするはずだが、興味深いのは、レニのビデオがドキュメンタリーといわれ、清水の作品が紛れもない劇映画であるという、逆説があるという点である。

だから、『簪』の冒頭の、田中絹代と川崎弘子が、身延山の山道を登ってくるところをキャメラがトラック・バックしながら撮る場面を評して、山田宏一が、まるでヌーヴェル・ヴァーグのようだというのは、絶対に正しい。わたしは、このシーンを見ながらロッセリーニの『神の道化師、フランチェスコ』の冒頭の、雨のなかを、修道僧たちがあれこれ喋りながら、裸足で歩いてくる場面を思い出したりしたが、そこには、人がただ歩いているところだけを撮っても、映画はでいるという健康な確信があった。清水宏もまた本能的にそのことに気づいていたのである。

ピーター・ローレ主演「魔恋」

Shun'ichi Karasawa's Spontaneous conversion Volume.1

今日はカッコいい義手の話をしましょう。義手と言えばブルース・リーの最高傑作、『燃えよドラゴン』に出てきた悪人・ハンの、剣の義手が有名ですが、あのキャラクターは、007シリーズのの第一作、『007は殺しの番号（ドクター・ノオ）』の悪役、ノオ博士がモデルですね。あの映画のノオ博士の義手は原子力電池を内蔵していて、鉄製のベルも握りつぶす力を持っていました。……もちろん、原作ではそんなマンガチックな義手でなく、手鈎風の義手、という風に描写されております。映画のあの義手は、さらにピーター・ローレ主演の怪奇映画、『魔恋』に登場した銀色の義手がモデルなわけであります。

他に映画に登場した義手で印象に残るものと言えば、まず、ディズニーアニメ『ピーター・パン』の悪役、フック船長の手鈎が代表ですね。フックという名前がそもそも〝手鈎〟という意味です。ピーター・パン物語を実写でリメイクしたスピルバーグの映画のタイトルが『フック』であることからもわかるように、あの手鈎はピーター・パン物語のひとつのキーになっています。ちなみに、義手・義足といった小道具は、映画においては多く、そのキャラクターの、精神的な部分の欠落を暗喩しているようです。そう言えば『スター・ウォーズ』においても、右手を失った主人公・ルーク・スカイウォーカーが、今は暗黒面に走った父親のダース・ベーダーを初めて父と認識するのは、ベーダーもまた、自分と同じく、腕を失って義手にしていた、ということを認識した瞬間でありました。父と子の間の断絶が、同じ肉体の一部分を失った者同士の共一感覚で蘇るのであります。

『ラストエンペラー』において、監督のベルナルド・ベルトルッチは、坂本龍一演ずる甘粕正彦を、〝悪人は必ずどこかに欠損部分を持っている〟として、史実に逆らって、彼を片腕として描いています。と、すれば、義手はその失った部分を補完する何を意味しているのでありましょうか。小説において、このような身体的欠落と精神的欠落をオーバーラップさせた傑作に、K・R・ジーターの『ドクター・アダー』があります。

ことは悪人ばかりに限りません。何か大事なものを失い、探し求める人物の比喩に、義手や人工器官はよく使われます。文学史上、最も有名な義手と言えばゲーテの『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』における義手です。

ゲッツ「いや、それはごかんべんを。では、ごきげんよう！（左手を差し出す）」

マルチン「どうして左手をお出しになるのですか！　わたくしは武士の右手には値しないのでしょうか？」

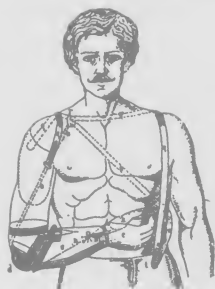
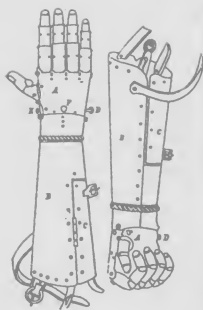
ゲッツ「かりにあなたが皇帝陛下であってもこの左手でご満足願わねばなりません。わたしの右手は戦場にでも出れば役に立たぬことはないにせよ、愛のこもった握手を感じることはできぬのです。これは手袋と一緒なのですよ。ごらんなさい。これは鉄なのです」

マルチン「さては、あなたはゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン閣下……」

ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲンは実在の武将で、一五〇四年、バイエルンのランツフートの戦いで右手を失い、一五〇九年にオーレンハウゼンという村の鍛冶屋に、鉄製の義手を作らせたことが記録に残っているんですね。彼はその義手を誇りに思っており、現在残っている彼の肖像画は、この鉄の右手（と、言っても鎧を着ているので義手だかどうだかよくわかりませんが）に槍を持たせて描かれております（左手は描かれていない）。

ゲーテはこの人物をモデルに、戯曲を書いたわけです。この場合も、義手におきかえられた失われた腕が何の比喩かは、言うまでもありますまい。ちなみに言えばこの戯曲『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』はドイツにおける疾風怒濤時代（シュトルム・ウント・ドランク）のきっかけとなりました。

ジュール・ベルヌ『月世界旅行』になると、この物語の主人公たちの所属する〝大砲クラブ〟という組織が、義手・義足の人間ばかりで占められている、という描写が出てまいり

Shun'ichi Karasawa's Spontaneous conversion Volume.1

ビューフォール伯爵の「貧乏人の義手」

ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲンとその義手

ヴェルヌ「月世界旅行」より。こちら向きでイスに坐っているのがJ・T・マストン。

ます（主人公のバービケーンのみは四肢を備えているのですが）。なにしろ大砲製造屋たち、大砲部隊指揮官たちばかりで作られているクラブなもので、

「大砲クラブでは四人に対して腕が一本あるかないか、六人に対して脚がやっと二本」

というような状況である、と描写されている。これは、この作品が描かれた時代、ちょうどアメリカで起こっていた南北戦争のニュースが日々ヨーロッパにおいて報道され、戦争負傷者のための義手・義足の必要性が認識されてきた時代を反映しているわけですね。

例えば、この戦争が終わって一年目、アメリカのミシシッピー州は、その歳入の五分の一を、戦争によって手足を失った人々の義手・義足用費用として支出しております。

『月世界旅行』において、最もユニークで愛すべきキャラクターとして描かれているのはT・J・マストンなる臼砲の専門家ですが、彼は両手と頭蓋を大砲の爆発で吹っ飛ばされ、鈎状の義手と、グッタペルカの頭蓋骨を使用しております。グッタペルカというと最近は葉をお茶がわりに飲む、飲用に栽培されているようですが、以前は樹液を生ゴムのように乾かし、皮膚や筋肉の代用に使用していたのですね。そういう、サイボーグみたいな半人間である人物を、最も人間味あふれる感情を持ち合わせたキャラクターとして描いたところに、ベルヌのうまさがあるわけです。

さて、この南北戦争時代こそが、義手がその機能を最も発展させた、言わば第一次黄金時代と申すことができましょう。優れた義手・義足の開発は、時代のニーズでありました。

事実、当時、パリ万博において最も大きい話題を呼んだのは、実にビュフォール伯爵によって発明・出品された最新式義手でありました。

この義手は前腕義手（手首の機能を大替する義手）、上腕義手（ひじから先の機能を代替する義手）、そして方離断義手（腕全体の機能を代替する義手）の三種があり、それぞれにコントロール・システムが考案されておりました。しかもその構造が簡単でこわれにくく、軽く、価格の安いことが特長で、伯爵はこれに「貧乏人の義手」と名付けたそうでありますが、貴族らしい高ピー的ニオイのする命名です。装着する人はイヤだったでしょうね（笑）。

映画の中の義手に戻ると、フック船長の義手も、ディズニーの映画では洋服ブラシなど、さまざまな物にアタッチメント方式で取り替え可能な方式、として描かれておりますが、いかにも映画ならではのコミカルな発想です。この方式の義手の最高傑作は『殺し屋ハリー／華麗な挑戦』に登場する、チャック・コナーズの殺し屋でありましょう。巨大な鉄バサミからマシンガン、さらにワインの栓抜きにまで交換できる義手が傑作で、完全に遊んで演出されておりました。

こういう風に、どちらかと言えば悪の小道具として描写されることの多い義手でありますが（映画における最新の義手の悪役は、イギリスのパンクSF映画『タンク・ガール』におけるマルカム・マクドゥエルでしょう）、実際の義手の歴史は、当然のことながら、事故や病気で腕を失った人々にとっては大きな福音であり、その改良と発達は大きな期待を持って見守られてきました。

次回はこの、義手の発達史を見ていくとしましょう。

§参考文献§

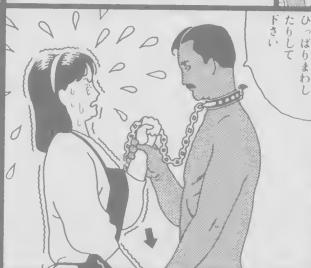
「義手」　児玉俊夫監修・医学書院

「月世界旅行」　ベルヌ・東京書籍

「傍役グラフィティ」
川本三郎、真渕哲・ブロンズ社他

ひさうちみちお

●定価1400円
[B6版上製／オールカラー]
装丁＝羽良多平吉

特別描き下ろし「理髪店主の少年時代」を含む、SM大河ロマン完全版！巻末に爆笑放談「恥と快楽について語る」(ゲスト＝中島らも)も収録！

トコトコ節

いましろたかし

●定価880円　装丁＝小林満

呉智英氏絶賛！

一般の読者なら嫌悪感しか持たないような作風なのに、どこか惹かれるものがあり、要するに「異様」としか形容できない作家なのだ。こういう作家は、何かのきっかけですさまじい大傑作を生む。……短編集『トコトコ節』にその予兆が十分感じ取れる。（「産経新聞」書評欄より）

イースト・プレス
〒112 東京都文京区水道2-10-10 小椋ビル
TEL 03(5395)5971 FAX 03(5395)5974

●定価には消費税を含みます。

地下街の噂

総合変態カルトショップが東京にあるらしい……。

タイの惨殺現場写真満載のクライムマガジン「アチャヤーガム」や「191」の新刊からバックナンバーまでが山盛りになっていた。
アメリカの頭ゲロッパ集団のミニコミ誌「FUCK」「ANSWER ME」「EXIT」なんかも発掘されていた。またニッポンでは手にはいりにくくなったウィトキンの「ハームスウェイ」をはじめ、ナンシーバルソンの「フェイス」や「ルッキング・アット・デス」なんかもおしゃれにあったりする。ちょっと目をこらすとフリークスの貴重本「ヒューマンオデティーズ」やリサーチのフリークス特集などが微笑みかけたり、タイの事件現場の生撮りビデオテープや見せ物小屋のビデオ、香港のフリークスたちのカンフービデオ、フリークスの魂の叫び「I AM NOT A FREAK」、そしてGGアレン、チャールズマンソン、J.Wゲイシーがぢーっとこちらを見てたりする。
隅っこには、フリークスカード、マフィアカード、麻薬トランプ、イボイボリュック、怪しいTシャツなどがころがっている。
あまりにトホホな店なので、こっそり来てください…とテンチョーは言っていた。

FREAK OF NATURE
BAROQUE CULT STORE

鮮度第一!!

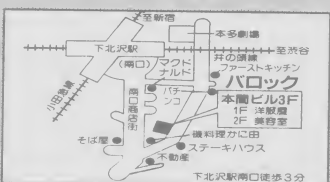
（商品は常に入れ替ります。まめに店をのぞくべし!!）

BAROQUE

バロック

OPEN　CLOSE
12:00〜22:00

バロック下北沢店

〒155 世田谷区北沢2-14-18 本間ビル3F
TEL 03-5486-6971

バロック高円寺店

〒166 杉並区高円寺北3-2-14〜2F
TEL 03-5373-2579

♥レンタルビデオ屋では見れない超こだわりアダルト、マニアビデオもいっぱいあった。18才未満はおことわりだってさ。♥

円

帰宅途中、毎晩オジサンの集団がいるのに気づき、一体何のために同じ場所に集まっているのかと不思議に思っていたら、先日やっと謎が解明された。某ファーストフードのゴミ出しを待っていて、ゴミ袋が出されるやいなや、ワッと集まり残り物をいただく、という具合だ。最近その集団にイラン人が2名加わった。そこを通りこすと、近所のライブハウスの前には色ツヤのよいパンツ見せファッションの若者が屯している。さらに酔っ払いの立ちションでアンモニア臭がたちこめる路地を通り抜け、家についてポストを開けると、『バックリ見えます！』と書いた裏ビデオ宅配のチラシが3枚……。さっ、明日もお仕事ガンバロー。【手塚】

♪

新宿伊勢丹デパートでのガロ祭95は初日開店3分後には丸尾画伯の絵を巡ってお客さんのジャンケンが始まっていたほど、大好評。結局開催期間中は校了で殆ど顔を出せぬまま、終わりそうである。ご協力頂いた作家の方々、本当にありがとうございました。（青林堂は大赤字だけど、お客さんに喜んで頂けたらそれで嬉しい）さて次号は秋のインドア特集、テーマは読書。漫画だってもはや読書に入るんだぞ、という事も含めて、楽しい記事をお送りする予定、乞御期待。次号校了後には遅れに遅れた夏休み（もはや秋か）を取り函館に帰省、カニイカウニイクラバカスカ食ってさらに太って帰ってくる予定。太った分人間も大きくなるといいのにねぇ……。【白取】

'95

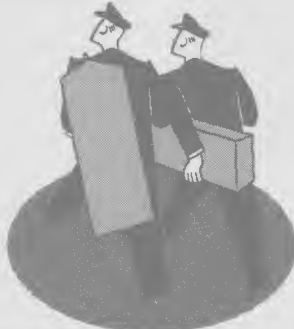
毎日毎日毎日毎日と―っても暑くてタマランので、海に潜る夢を見て凌いでいます。【高市】

OCT.

◐

先日、三本義治さんが会社に来てくれました。この夏の暑さで全身アセモができたそうで、非常にかゆそうでありました。けどこれをかくのがものすごく気持ちがいいそうでオナニーするより気持ちがいいということでした。／一日一食でキウイととうふを食べている逆柱いみりさんは夏バテになったそうです。／腰がじんじんする痛みに耐えながら、ボクシングとサンボをやっている総合格闘まんが家、花くまゆうさく氏の単行本『野良人』が絶賛発売中です。ちんこがじんじんするくらいに、…うっ…面白いので本の隅から隅まで読んで楽しんでください。／それでは。【志村】

今号の編集が終わると、いよいよ渋谷区初台に民族大移動であります。長年慣れ親しんだ本の都・神保町を離れるのはツライのですが、ここは心気一転、腹巻をしめなおして頑張らねば!!「伊峡」のラーメンよさようなら〜、クーンクーン…たまには食べに行くからね。ルルルのル〜♪【周】

◎

蛭子さんの原稿を受け取りに雀荘でまちあわせしました。蛭子さんは私をみるなり開口一番「まだ（青林堂に）いたんですかぁ！」と失礼な事をいいましたが、負けているにもかかわらずヤクルトを二本もおごってくれたので、ちょっぴりファンになりました。【大場Q】

♂

引越しである。かつてツァイト特殊事業部にいた僕にとっては古巣の初台だが、初台ってのはホントに何もないところで、唯一、駅に物凄い地下鉄風が吹くおかげで女子高生のパンモロにありつける、その程度のメリットしかないとこなのだ。だが、パンモロやパンチラで言わせていただければ、神保町界隈には迂濶な女学生がたくさんおられるので、地下鉄の突風なんかなくても、実に多様なパンチラ・パンモロを見物することができたのである。さらば神田神保町！【大富豪】

♥

新宿ロフトプラスワンでの「ガロ・ガガガの待合せ」に多数おいで下さった読者の皆様、本当に有難うございました。一年ぶりに懐かしいお顔を拝見したり、初めて参加して下さった方のエネルギーに触れることができ、楽しい時間を過ごしました。これがきっかけとなって、自由に人が交流できる場が自然発生的に形成されたなら、僕らの試みはほぼ実現したようなものです。その時はぜひ僕らにも参加させてください！【山中】